

生徒の望ましい行動変容に迫る技法

～不適應生徒の理解のあり方を中心に～

目 次

| | | |
|-----|--------------|-----|
| I | テーマ設定理由 | 109 |
| II | 研究仮説 | 110 |
| III | 研究内容 | 110 |
| 1. | 学校不適應とは | 110 |
| (1) | 子どもの不適應行動の構造 | 110 |
| (2) | 問題行動 | 111 |
| (3) | 実態 | 112 |
| (4) | 背景 | 113 |
| ① | 風土的背景 | 113 |
| ② | 社会的背景 | 113 |
| ③ | 家庭的背景 | 113 |
| (5) | 生徒の要因 | 113 |
| 2. | 生徒理解について | 114 |
| (1) | 本校の実態 | 114 |
| (2) | 生徒理解の方法 | 116 |
| (3) | 生徒理解の技法 | 116 |
| ① | 観察法 | 118 |
| ② | 心のサインをよむ | 119 |
| ③ | 個人面接の技法 | 120 |
| 3. | 教師の自己変容の必要性 | 126 |
| (1) | エゴグラムによる自己変容 | 126 |
| (2) | 自己分析の実践 | 127 |
| IV | 研究の成果と今後の課題 | 128 |

生徒の望ましい行動変容に迫る技法

～不適應生徒の理解のあり方を中心に～

浦添市立神森中学校教諭 園 崎 香代子

I テーマ設定理由

「荒れる中学生」と、大きな見出しでマスコミ等に取り扱われ、社会の中心問題にまでなった中学生の非行、校内暴力は昭和55年をピークに統計の上では鎮静化の傾向を見せてきたが、代わっていじめの問題や登校拒否、学校不適應生徒の問題がクローズアップされてきた。

これまで、学校不適應生徒による問題行動はどの学校でも存在していたし、また、問題行動を起こした生徒に対する指導においても生徒達は教師の指導を受け入れ、悪かったところは反省をし、人間関係においてもお互いに理解できていたと自負している。

昨年、はじめて本校の3年生を受け持ち、一ケ年間一度も登校できなかった心因性の登校拒否児や、喫煙、深夜はいかい、家出、器物破損、飲酒、赤や緑、紫に染めた髪、だぶだぶズボン、夜間の校内侵入、時差出校、授業の欠課が400回を越えた生徒など枚挙のいとまがない程の問題行動が見られた。そのたびに、本人との話合いや、家庭訪問、父母呼び出し、そして毎日のように電話連絡を通しての指導、校内においては生徒指導主任や学年主任、部活動顧問、各教科担任等との連携を密にしながらの指導が繰り返されていったがとうとう生徒達に行動の変容はみられなかった。その中で、生徒の「心が見えない」状況はつづき、教師の考えている生徒象と現実とのギャップを認識した。このような状況では生徒に対しやる気がない、自主性がない、思いやりがない、などと一方的に評価される。

中学生の問題行動を生み出す背景には大きく分けて2つあると言われる。その一つには家庭、学校を含めた現代社会の特性の問題点である。それは家庭における過保護や放任、受験中心の教育体制、学歴社会、都市化、情報や刺激の氾濫、価値観の混乱などを多くのことが上げられる。他の一つは中学生が発達的にみて親からの独立という困難な時期に入っていることである。

ニールは「不良行為をなすものは愛されぬ子どもでもある。愛されぬ子どもはまっすぐに育つことはできない。それ故に愛されぬ子は、心の中に空虚なところができる。その空虚を埋め合わせるために、いろいろな不良行為をするものである。愛を欲しているものに愛を与えるしか道はない」といっている。(ニールの思想 霜田静志より)

生徒の行動は感情の発露であり、豊かな感情は望ましい行動の原動力である。そして、思いやりの心は温かい心でしか育てられない。

そこで今、生徒一人一人が何を考え、何に悩み、何がしたいのか生徒の内面に迫り、また、何が生徒達を問題行動に走らせているのか、目ざとく見てとって適切な援助が必要と考える。そのために教師と生徒の望ましい関係を成り立たせ、日頃から生徒のそれぞれの個性を把握し、それを生かしていく必要がある。このことから生徒を内面から理解し、生徒指導をする場面で有効な技法等を活用することにより生徒との人間関係が豊かなものになると考え本テーマとした。

II 研究仮説

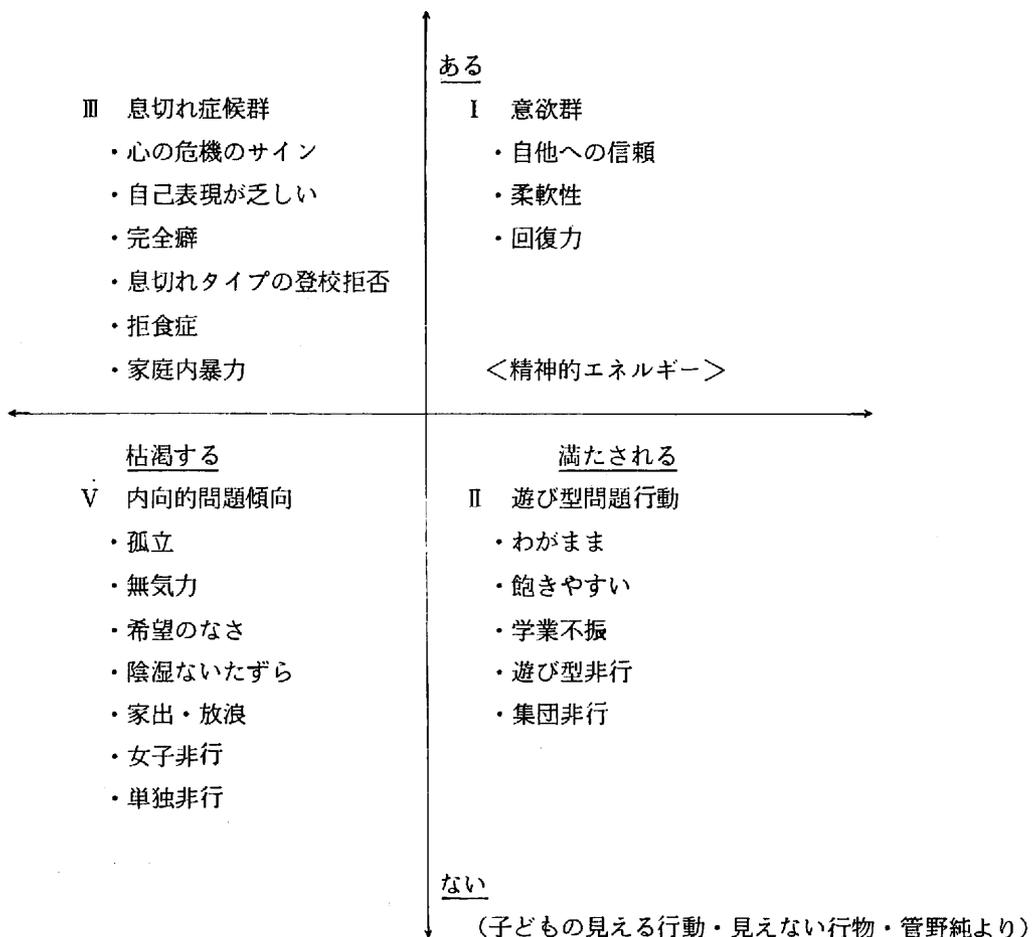
不適応生徒の背景を知り、生徒の心理的発達の特徴を加味しながら、生徒の理解を深め、生徒との関わり方の技法を知ることによって望ましい行動変容につながるだろう。

III 研究内容

1. 学校不適応とは

一般の生徒は、学習活動や学校生活全般について、毎日メリハリのある楽しい生活を送っている。そして、家族や友人、教師との人間関係においてもうまく適応でき、家庭や地域社会においても適切に適応できるものである。しかし、生徒の人格形成の過程で不十分なものがあつたり、精神的に健康を損ねている場合は人間関係や学習等に不安や不満を持ち学校生活がうまくいかなくなる、これを学校不適応としていわれている。

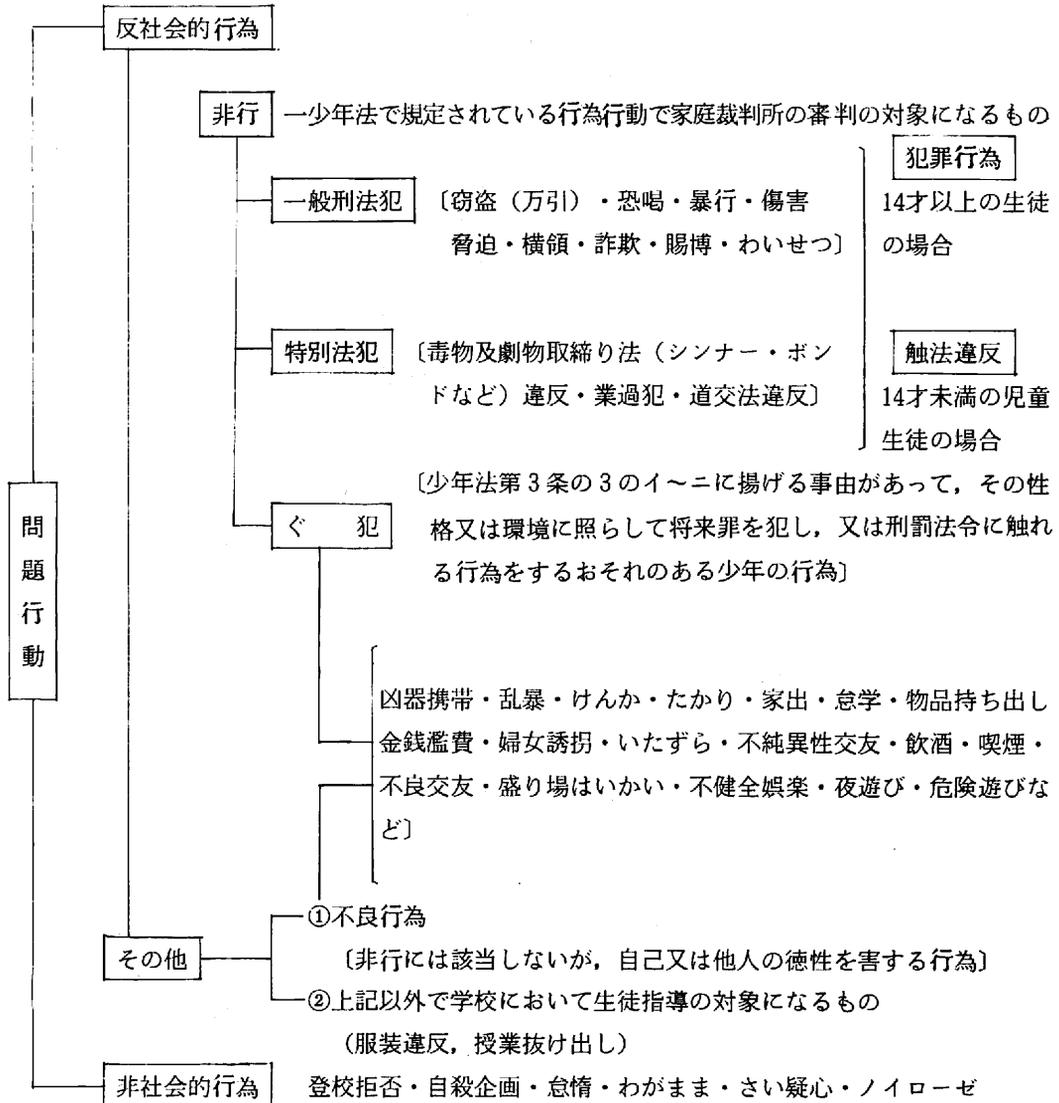
図1 子どもの不適応行動の構造
<耐性>

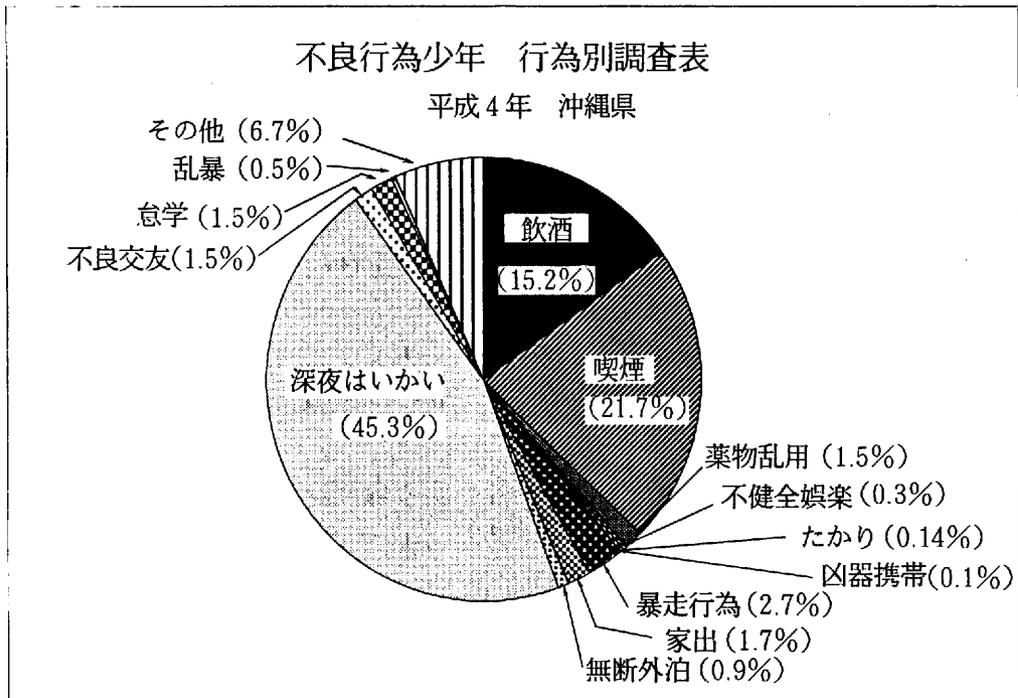


(2) 問題行動

学校に適応できない生徒の問題行動とは「学校における生徒の学業を阻止する行為や行動」と文部省は述べている。いわゆる非行にとどまらず、学校において、教育的立場から特に指導が必要とされる行為や行動などが問題行動と呼ばれている。心身の発達の著しい中学生においては全ての生徒がどのようなきっかけで問題行動を起こすとも限らないので、問題行動に対する予防や指導のあり方を教育的課題として探究する必要があると考える。

図2 非行と問題行動の相互関係





沖縄県の不良行為少年の行為別補導状況は「深夜はいかい（45.3%）がだんぜん多く、次にくるのが「喫煙（21.7%）」「飲酒（15.2%）」である。本土の場合は「喫煙（45.0%）」が多く次に「深夜はいかい（26.6%）」となっている。このことから沖縄県の社会性からくる問題行動の特徴が表出される。本市の補導状況も県と一致しており、いかに県全体の問題として青少年の「深夜はいかい」が様々な問題行動の要因になっているかは想像できる。

本校においても深夜はいかいから派生する問題が散在している。このことは学校の指導のみならず社会的な背景にも原因の一端はあるものの、最大の原因は家庭にあると考える。このことは本校職員の調査から、問題行動の原因について「1,親の教育力がない」「2,親が放任である」「3,学力がついてない」などからもうなずける。

本校の不適応生徒の家庭環境についてみると離婚による単親家庭、再婚による親子の不和など直接子どもに精神的、経済的負担を与えている状態においても、親の子ども達への配慮は見られない。また、それ以上に両親が揃っていても夫婦の仲が悪い場合が問題行動のある生徒の中では最も多い。このことから、問題行動を持った生徒の家庭は、生徒にとって安住の場所ではなく、友達に精神的安らぎの場所を求めていると考えられる。

(4) 背景

① 風土的背景

気候は亜熱帯気候に属し、夏は高温で日差しが強く、厳しい暑さとなる。昼夜の気温差は小さく6月に30度前後が多く、冬でも15度～18度が平均となる。日中の暑い時間は家の中にいても日が傾いてから活動する事が多く見られる。

② 社会的背景

24時間営業のコンビニエンスストアの出現により深夜まで営業している店も多く、大人自身が深夜まで遊び歩いている状況である、青少年も深夜はいかいいについて抵抗が少ないうえに遊びの楽しさを知ってしまい、それが常習化して様々な問題行動を引き起こす事になっているのであろう。

③ 家庭的背景

沖縄県は全国的に離婚率が高く、雇用状況も厳しい中で、生活のために母親も夜の仕事につかざるを得ない状況にあり、帰宅が遅い事もあって子供に対する放任が多いといわれている。また、「平成2年度的那覇市青少年センターによる調査」では門限のある家庭が小学校（73.5%）・中学校（45.6%）・高等学校（34.6%）と年齢が高くなるにつれて減少している。このことから家族の子供への対応の甘さがみられる。

さらに、学歴志向の一般的風潮の中で子供に対する期待過剰や母親の父親蔑視の傾向が見られるなかで、両親の不和や親のしつけの一貫性のなさが問題行動を深化させる要因とも思われる。

(5) 生徒の要因

人格面

- 善悪を含めて教えるべきものを教えていない。
- がまんができず、ちょっとした欲求不満にカッとなる。自己コントロールに欠ける。
- 計画性に欠ける。（お金の使用、時間の使用等）
- 人生の目的性がはっきりしないので無気力になり、友人に誘われると主体的に接しられない。

生活面

- 家庭、学校での生活で承認されることが少ない。
- 欲求不満が多く、不適応となりやすい。
- 学校が楽しくない。
- 同じ様な心理状態のグループに属し、不良行為から抜け出せなくなる。
- 不良行為が多くなると、注意され、叱られる生活が続いてしまう。

2 生徒理解について

生徒指導は一人ひとりの生徒の潜在的可能性を発見するという、いわゆる生徒理解から始まる。本校の調査結果からも「先生は生徒の気持ちを理解してくれない」と感じている生徒が多い。このことは教師に対する不信感がつり、生徒の心に揺さぶりをかけることは難しいと考える。

生徒理解とは一般的にいわれている調査、検査、観察などによって、生徒の性格や家庭環境や学業成績など、教師が知らねばならないことだけのように思われている。確かにこのことも生徒理解のうえでは必要であるが、しかし、これだけでは問題の解決にはならない。生徒の問題行動を考慮する時その行動の背景にはどのようなメカニズムから表現されたものなのか、生徒のパーソナリティーとの関連で生徒を理解しなくてはいけないと考える。生徒を理解することは教育的働きかけの出発点であり結論ではない。教師の日常的な生徒とのかかわり合いによって、生徒の認知的環境を受容していく事により生徒を「理解する態度」と考える。そして、生徒理解とは生徒の自己実現を援助するために行うのである。

(1) 本校の実態

「中学校のストレス調査」により本校の生徒（784人）が感じていることを調査した。全部で73項目からなり、それぞれ「先生について」「級友・友達・仲間について」「授業・勉強・成績などについて」「学校生活・校則・生徒指導などについて」「将来の事・そして自分自身について」「家族・家庭について」等の感性の部分や「感情・身体について」の体に関することを調査した。その中から、感性の部分で20%以上の解答について考察していきたい。

中学生のストレス調査

| 項目 | 20 | 25 | 30 | 35 | 40 | 45 | 50 | 55 | 60 | 65 | % |
|------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|
| (1) 先生は生徒の気持ちを理解してくれない | | | | | | | | | | | 35.5 |
| (2) 先生は「えこひいきを」している | | | | | | | | | | | 30.4 |
| (3) 先生はきびしすぎる | | | | | | | | | | | 20.2 |
| (4) 先生はよくガミガミ言う | | | | | | | | | | | 45.2 |
| (5) 先生はよく皮肉を言う | | | | | | | | | | | 27.5 |
| (6) 先生は言うこととやることが一致しない | | | | | | | | | | | 28.8 |
| (7) 先生の態度と感情の変動が激しい | | | | | | | | | | | 25.8 |
| (8) 学級、あるいは学校に嫌な生徒がいる | | | | | | | | | | | 40.8 |
| (9) いつも勉強に追われている | | | | | | | | | | | 22.6 |
| (10) 勉強の方法がわからない | | | | | | | | | | | 36.2 |
| (11) 先生の教え方に不満がある | | | | | | | | | | | 28.1 |
| (12) テストが多すぎる | | | | | | | | | | | 20.0 |
| (13) 嫌な教科の授業を受けるのは苦痛だ | | | | | | | | | | | 37.9 |
| (14) 努力しているけれど成績が伸びない | | | | | | | | | | | 35.3 |
| (15) 学校の校則が厳しい | | | | | | | | | | | 26.9 |

| 項 目 | 20 | 25 | 30 | 35 | 40 | 45 | 50 | 55 | 60 | 65 | % |
|-------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|
| (16) 学校の服装指導が厳しい | | | | | | | | | | | 29.1 |
| (17) 希望している高校に行けるかわからない | | | | | | | | | | | 63.9 |
| (18) 将来進路がはっきりしていない | | | | | | | | | | | 47.6 |
| (19) 自分の性格、体（容姿）、くせが嫌いだ | | | | | | | | | | | 39.5 |
| (20) 親と意見が合わない | | | | | | | | | | | 21.2 |

① 生徒のストレス調査から

教師についての項目からみると、「先生は生徒の気持ちを理解してくれない」が（35.5％）いて9項目の調査をした、その中から8項目について20％以上の生徒が不満を持っている事がわかる。「学級、あるいは学校に嫌な生徒がいる」（40.8％）については人間関係がうまくいってないのではなかろうか。

「授業、勉強、成績などについて」では9項目中6項目が不満を見せている。特に「勉強の方法がわからない」（36.2％）「努力しているけど成績が伸びない」（35.3％）等はいかに学習について悩んでいる生徒が多いかがわかる。問題行動にはしる生徒のほとんどが基礎学力不足であることから抜本的解決が必要であると考え。また、そのような生徒達は「目標がない」「目的意識がない」などと言われる。この調査からも懸念されることは「希望している高校に行けるかわからない」（63.9％）「将来の進路がはっきりしていない」（47.6％）など、目標が定まらないことに対する不満は多く、進路指導の早期充実の必要性を痛感する。また、「自分の性格、体（容姿）くせが嫌いだ」（39.5％）などは青年期特有の自己嫌悪の表れだと考える。

<学校不適應生徒のストレス調査より>

本校に40名余の不適應生徒がいる中ではほとんど登校しないか、あるいは時差登校のため学級活動に参加できない場合が多い。そのためアンケートなどがとれない悩みも抱えているのでその生徒達の実態はなかなかつかむことはできない。しかし、このほど4名の生徒から調査した結果が得られたが妥当性はなくともおおまかな様子はうかがえるのではないかと考え、考察してみた。適應児の場合と比較すると先生に対しては殆ど学校に来ないせいか不満は感じられない。一番多いのは4名中4名が進路に不安を持っていることである。また、親に対しての不満は最も多い、このことは教師の側からも出された不満でもあった。

| | | | |
|--------------------------|----|-----------------|----|
| 1 先生はよくガミガミ言う | 3人 | 8 親の生き方が気に入らない | 2人 |
| 2 学級・学校に嫌な生徒がいる | 2人 | 9 親と意見が合わない | 2人 |
| 3 勉強の方法がわからない | 2人 | 10 家が面白くない | 2人 |
| 4 授業についていけない | 2人 | 11 親があまり家族を省みない | 2人 |
| 5 将来の進路がはっきりしない | 2人 | 12 両親の中が悪い | 3人 |
| 6 希望している高校に行けるかどうかかわからない | 4人 | | |
| 7 先生の言うこととやることが一致しない | 2人 | | |

(2) 生徒理解の方法

一人ひとりの個性を理解し、その個性に即した指導を進めていくために、できるだけ多角的に、科学的、客観的に生徒を理解しようとする時の考えられるべき項目の内容に次のようなことがあげられる。

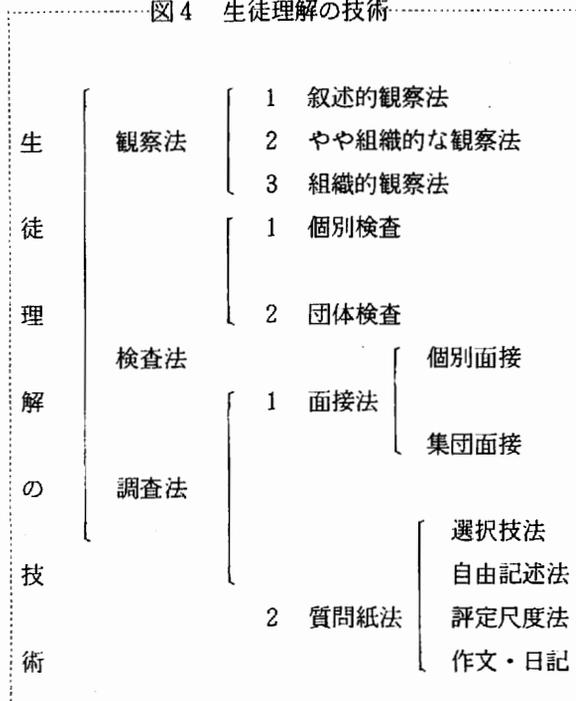
| 内 容 | 項 目 (例 示) |
|-------------|--|
| 一般的な資料 | ①氏名 ②生年月日 ③住所 ④電話 ⑤保護者名 ⑥緊急時の連絡方法 ⑦その他 |
| 家庭環境 | ①家族構成 ②家族の生活 ③家族の教育的関心 ④本人に対する親の態度 ⑤家族間での本人の地位 ⑥祖父母、同居人 ⑦本人の家庭に関する感じ方 ⑧その他 |
| 地域の環境 | ①近隣の生活（住宅街、商店街、工場街、盛り場、公園等） |
| 家庭生活 | ①睡眠状態 ②家事に手伝い ③アルバイト ④家庭学習 ⑤塾・家庭教師 ⑥遊び ⑦小遣い ⑧その他 |
| 学校生活 | ①教科学習 ②特別活動 ③出席状況 ④学校生活への適応 ⑤通学方法 ⑥時間 ⑦その他 |
| 生育歴 | ①出産時の状況 ②乳幼児期の病気 ③乳幼児期のしつけ ④歩行開始と始 語の時期 ⑤その他 |
| 性格及び行動の特徴 | ①情諸的反応 ②精神的健康の状況 ③習癖 ④その他 |
| 友人関係 | ①友人関係の推移と現状 ②交友関係についての本人の特徴 ③グループと の関係 ④その他 |
| 身体の特徴 | ①病歴 ②身体の特徴 ③精神身体的問題 ④ |
| 標準化された検査の結果 | ①知能検査 ②学力検査 ③性格検査 ④その他 |

(坂本昇一著より)

(3) 生徒理解の技法

「生徒指導とは、本来、一人ひとりの生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すものである。」(生徒指導資料第20集・文部省)とある。

図4 生徒理解の技術



学校のあらゆる教育活動の場で生徒指導は行われているし、生徒の抱えている問題も十人十色である。

生徒指導の前提に生徒理解があり、そのために教師は生徒との関わり方をどの様にしたらよいかが生徒との理解の一步であると考ええる。

本校教師の調査結果から「問題行動を起こした生徒への指導をどのような方法でしていますか」では「そのたびに説諭を繰り返している」との答えが71%を占めていた。しかし、効果は期待できなかったとある。教師にとって指導するたびに「私はあなたのためにこんなに真剣に話をした（教えた）のになぜ理解してくれないのかと教師は不満を訴えることがある。このようなとき教師は〇〇をした「つもり」であって、生徒はそれをどう認知したかということを理解しようとしな

(坂本昇一著より)

い。教えたつもりでも生徒はどう受け取ったかが問題であるということである。

教師が生徒の内面を理解するためには、教師自身の思考のわく組や感じ方で理解しようとしても、それは生徒の内面を正しく理解することはむずかしいであろう。生徒の思考のわく組、内的準拠わく（生徒の考える標準）を教師が受け止め、受容するとき、生徒の内なる悩みも喜びも理解できるし、適切な援助ができるものである。それと共に教師の側にも自己開示することによって、教師も理解してもらえる、お互いに理解が深まり人間的な関係ができる。このような状況において生徒が教師に心を開き、いくらかでも耳をかそうという気になり、行動変容につながるものとする。

筑波大学の国分康隆教授によると説得的対応の指導で効果の期待される生徒は下のような生徒に見られるという。

- ①わがままで世話知らずの人
- ②良心的すぎて、～ねばならぬに固執し、自縄自縛になっている人
- ③先の見えない人
- ④お人好しすぎて、まわりの人が自分をどう見ているかに気づいていない人
- ⑤なんらかの危機的状況にあり、一時的に自力で判断し行動する能力が弱まっている人

① 観察法

生徒の具体的な行動の累積から行動の傾向をとらえることにより一人ひとりの生徒の素質、能力、適性、問題行動などを把握するものである。

留意点

- ア 客観的に配慮する。
- イ 行動の背景も把握する。
- ウ 集団一般の平均からの逸脱に注意する。
- エ 他面的に理解するようにする。

観察・相談・指導の記録の作成

これまで生徒指導用の記録として、形式にとらわれることなく普通のノートに生徒の行動や指導観察したことを記録していった、しかし、このような記録は担任だけの資料に留まり次年度への継続資料としては使えなかった。本校のように様々な問題行動をかかえている場合はどうしても生徒の継続指導が必要であり、また、その背景を知ることが必要である。毎年担任が変わろうとも生徒のこれまでの指導が見えるように3ヶ年間の観察・相談・指導の継続した記録簿を記しておきたい。

しかし、生徒の問題行動には対教師個人への反発もあり、生徒だけを責められない事もあるので、記録の通りにそのまま生徒を評価するのは危険をはらんでいる。充分気を付けて扱っていききたい。

| 観察・相談・指導の記録 | | | | | | | | |
|-----------------|----|---|------------------|-------|---|----|---|---|
| 氏名 | | | 生年月日 | | | | | |
| 1年 | 組 | 番 | 2年 | 組 | 番 | 3年 | 組 | 番 |
| 住所 | | | | | | | | |
| 保 護 者 | 氏名 | | 家 族 構 成 | 両親の氏名 | | 父 | 母 | |
| | 職業 | | | 兄弟 | | | | |
| | 電話 | | | 同居人 | | | | |
| 生徒の家庭環境 | | | | | | | | |
| (1) 家庭での生徒の生活状況 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| (2) 保護者の教育的関心 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| (3) 経済的な状況 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| (4) 本人に対する親の態度 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| (5) 学校での生徒の状況 | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |
| | | | | | | | | |

| 年月日 | 観 察 ・ 指 導 ・ 記 録 内 容 | 指 導 者 |
|-----|---------------------|-------|
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |
| | | |

| | | |
|--|--|--|
| | | |
| | | |
| | | |

② 心のサインをよむ

私たちは悲しいときに悲しい表現をする。嬉しいときに嬉しい表情をするが、必ずしもみんながストレートに感情を表に出すわけではない。心のどこかに悲しみがある限り表面に表れてくる行動の隙間から何らかの形で伝わってくる。例えばはしゃぎ方がなんとなく不自然だったりする。このような行動の背後に、行動の表面的な意味とは全く異なる内面的な意味が隠れていることがある。このような心の危機を伝えるメッセージこれをサインと呼んでいる。

何か問題が生じる前に、生徒は言葉で訴えたりする、しかし、それほど深刻そうに見えなかったり、意味が不明瞭でわからなかったり、教師が耳を傾ける余裕がないときに発せられると聞き流されてしまうことある。事が起こってから反省することがないように言語能力の弱さや表現する力の弱い生徒もいることを念頭において、生徒の内面的理解をしてサインをよみとる必要がある。

| | | | |
|----------|-------|---------|------------|
| 寂しい | } 気持ち | 落ち着きのない | } 行動として表れる |
| 人に認められたい | | 強がった | |
| 人に甘えたい | | 反抗的な | |
| 人に頼りたい | | ひょうきんな | |
| 救ってほしい | | 快活な | |
| 不安な | | 無感動な | |

③ 個人面接の技法

日常の教育活動の中で、様々な問題で生徒や保護者との会話を持つ機会が多い。しかし、「家出をした生徒と話をしたが教師の話を聞いてくれない」「欠席の生徒に理由を聞いたが理由を話してくれない」等と対話が成立しない場合が多い。ややもすると生徒の対応に苛立ちを感じ訓育的、管理的になってしまう。このような時に個人面接の技法を身につけ、活用することによって信頼関係作りや相互理解が促進されるだろう。

ア 教師が行う個人面接の要素や条件

○面接の形式：呼び出し，定期，チャンス，自主来談

○面接内容：子ども……………学業，進路，対人関係，（子どもや教師），性格
と対象者 健康，非行，問題行動等，家庭，部活動など

保護者……………子ども，保護者，家庭，教師の問題など

同僚の教師……………仕事上の問題，私的な問題など

○面接場所：相談室，職員室，教室，廊下，校庭，家庭など

○面接者：学級担任，教科担任，生徒指導や進路指導担当，学年主任，養護教諭
管理職など

○面接の時間帯：休み時間，放課後，授業時間，家庭訪問など

イ 面接の流れ

① 面接の時間の計画，子どもに関する情報の収集

② 面接の準備

○情報を基に子どもの状態像を把握する。

○問題点を整理し，面接方法を考える。

○面接の方針を明確にする。

③ 面接の実施

○面接場所，座席の配置，時間などの場面構成をする。

○面接を行う上での約束，目的，方針の説明を行う。

○面接の技法を用いて，理論，心理療法に基づく援助を行う。

信頼関係の形成，子どもの発言の受容，言い換え，明確化，課題の明確化，解決策の探索実行，評価など

④ 面接終了後

○面接の記録を整理する。

○必要に応じて教師間，家庭，病院や相談所などとの連携を図る。

○次回の面接までの間，子どもへのフォローを行う。

○次回の面接の準備を行う。

ウ 教師が間違いやすい面接の技法

- 話の内容だけに目を向け、教師の知りたいこと柄の質問を次々繰り返す。
- 子どもの感情を大切にできなかったり、面接場所にいない人を悪者にする。
- 問題解決と原因追求を急ぎ、教師の頭の中から解答をだそうとする。
- 教師の価値観に基づき、子供の質問や要望に、すぐ答えようとする。
- 子供のしていることに気づかない、また、気づいても変えられない。
- 子どもとの間に信頼関係を作ることをおろそかにしている。
- 子どもとの関係を通して教師自身が行うことを決めていこうとしない。

エ 基本的技法

● 子どもと呼吸を合わせる

自分の思っていることや感じていることをそのまま、心置きなくはなせる場や機会、雰囲気を作ることである。相手の呼吸に合わせてたり、しぐさをまねることから観察力や集中力を身につける。

● 傾聴的態度と受容

教師は話の内容を批判、非難、評価せずに指示的、訓育的態度をとらない。ポイントは相手との距離、身体の向きと動き、姿勢、視線の交差、時間の共有、足の位置、顔の表情、声の大きさと話し方、意欲等である。

● 質問

開かれた質問：子どもが自分の思っていることを素直に話せたり、思考を深めたりする過程で、子どもの発言を積極的に促すことができる。

<例>「あなたの家族構成はどのようになっていますか。」

閉ざされた質問：情報収集のための質問が多い。

<例>「家族は何人ですか」「兄弟けんかをしますか」

● はげまし、繰り返し、言い換え、要約

発言が促されたり発言内容や感情の自己理解が進む。また、教師として聞いた内容の確認ができ、会話の方向づけが可能となる。

● 感情の明確化

子どもは現象面に関しては細かく説明してくれるが、情諸面や感情面に関する発言はきわめて少ない。その結果、表面的な問題の解決に終始しやすい。教師は隠された感情を子供に気づかせ、意識化させる必要がある。

<例>「いま、どんな気持ちですか」

「それは、お母さんに対するどんな気持ちからですか」

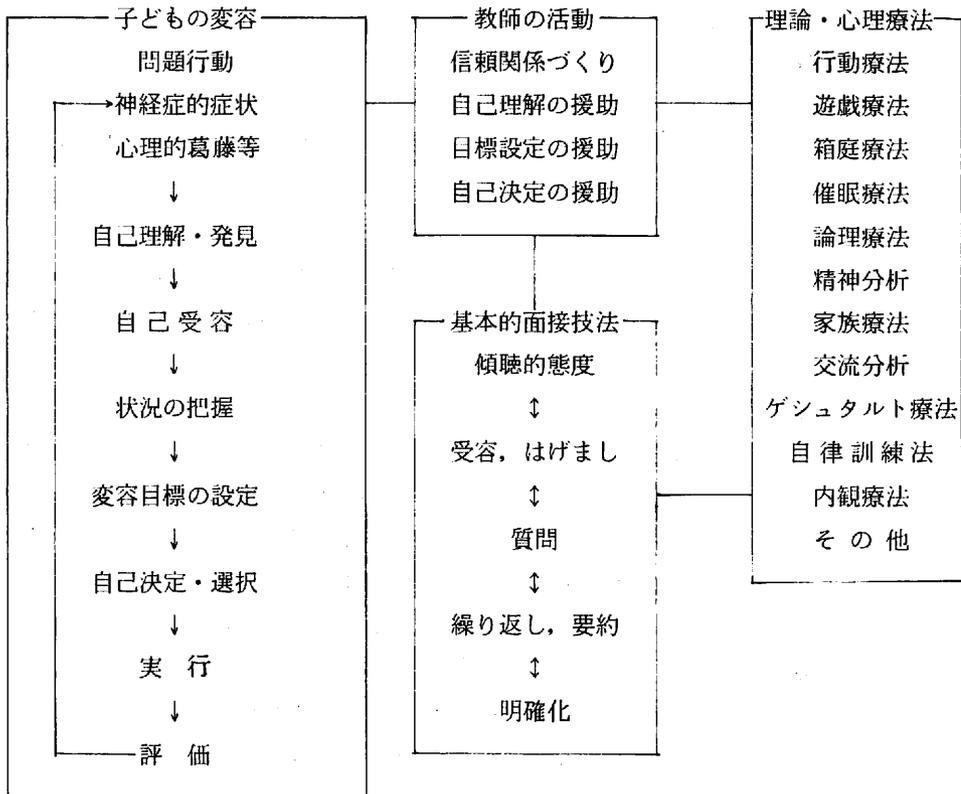
オ グループカウンセリング

一人ひとりの面接をするには時間がない場合に、6～7人のグループにより話し合う方法である。共通した問題について話し合うので、話しやすく、お互いの考え方もわかり、教師がうまくリードすれば信頼関係も持てる。

カ 面接の技法と理論，心理療法

個人面接の技法にはさまざまなカウンセリング理論や心理療法に応じて特徴がみられる。しかし，基本的には子どもと教師とが信頼関係を形成し，子どもが自ら積極的に自己洞察を進め，自己決定を行う意欲と自信を喚起するのに有効と思われる面接技法には互いに共通点が見いだせる。

図5 《面接過程における子どもや教師の動き，面接技法，理論，心理療法》



《事例1》 場における教師の関わり方（T雄の場合）

| | |
|--------|--|
| 家庭環境 | 小学校までは両親と一緒に住んでいたが，中学に入り離婚したので離島の叔父さんの所へ2年生の1学期まで預けられる。その後父親と住む。父親は殆ど職を点点として安定しない。よく酒を飲む。兄弟はいない。 |
| 性格行動 | すぐカッとなり，手が出る。お調子者で機嫌がよいときと，悪いときははっきりと態度に表す。 |
| 学校での様子 | 問題行動の生徒と共に常に行動している。服装違反，喫煙，時差出校，授業のさぼり，深夜はいかい，2年生の時，女教師に対し暴行を加える。 |

| 場面 | 生徒の行動 | 現象からの理解 | 教師の関わり方 |
|-----------|---|--|--|
| に遅刻して教室 | 休み時間によくタバコを吸っているらしい。遅刻をしてもニタニタしながら入る | おそらく、またタバコを吸ってきたのだろう。タバコを見逃すわけにはいかないな。 けじめがないな。 | <生徒を呼びだす> 「こっちにきなさい」 <2人きりになる> 「遅刻しても、挨拶もできないのか」 |
| 動別する教室に移 | ふてくされている。片足に重心をおき立つ。小さい声で「すみません」 | タバコの臭いがするタバコについては叱らないといけないな | 大声で 「タバコを吸ったのね」 「臭いがするからわかるよ」 |
| み生徒とうにら | 目つきがだんだん陰しくなる。 「持ってない」 首を振る。 「ぬー」 | 嘘を通すつもりだな絶対認めないという態度だな。 どの様にして認めさせようか。 | 「タバコを持っているんだろう」 「出しなさい」 <ポケットがふくらんでいる> |
| 状態落ち着きがない | 目はキョロキョロしている。 「知るか」 顔が青ざめ目つきがするどくなる。 教師に対して威嚇する態度をとる。 | ポケットを調べてみようか。 現物が見つかったのだから謝るだろう。自分の非を認めたくないのだな。 | <ポケットをさわってみようか> 「これはなんだ」「タバコとライターだろう」<平手うち> 「これでも知らないというのか」 「君は嘘をついたんだよ、わかっているのか」 |
| 凶暴な状態 | 鋭い目でにらみつけ「タックルサリンドー」と暴言を吐く。 近くの鉄棒をちらちら見る。手は拳をにぎり頭の所まであげ顔を近づけて来る。 | 暴力で来るかもしれないな。 鉄棒でやるつもりだな。 興奮しているな。 今、何を言っても通じないだろう。 | (大声で) 「今の言葉は誰に向かって言っているのだ」 <ジーと相手とにらみ合う> <優しく言う> 「お互い冷静になろうじゃないか」 |
| 落ち着く | 何を言っても聞く耳持たないという態度だんだん目をそらしていき、足元を見る静かに教師の前から立ち去っていった。 | 今、説教しても駄目だろう。 自分が悪かったことがわかったのだろうか。 今後とも関わっていく必要があるな。 | <静かに見つめる> 「タバコの害については知っているね」 「中学生がやるべき事ではないよ。」 「後でゆっくり話し合おう」 |

《事例からの考察》

学校不適應の生徒が問題を起す度に「またか」という怒りが先だち、罰やお説教を繰り返してきた。事例からもわかるように生徒の背景には悲惨な家庭状況があり、これまでの生育歴が横たわっている。教師は説教をする度に「生徒がわかってくれただろう」のつもりでいる。しかし、生徒は何も変わってないのである。事例からいえることは生徒との信頼関係もない中で生徒は教師に対し反発以外の何もないのである。最も指導のまずい事例である。

《事例2》 年間を通しての生徒理解 (O雄の場合)

| | |
|--------|--|
| 家庭環境 | 父母、兄、姉の5人家族、父親は自営業で毎日、帰りが深夜になるので子供の教育は殆ど母親まかせである。兄や姉ともしっかりしている。 |
| 性格・行動 | おしゃべりで明るい、自分が好きなことは一生懸命だが、あきっぱいなので長続きしない。スポーツは大好きで素質もある。 |
| 学校での様子 | 問題行動の生徒と常に行動を共にしている。服装違反、喫煙、飲酒、深夜はいかい、2年生の時に無届欠課、無届欠席授業のさぼり等が目だった。 |

| | 生徒の動向 | 内面の理解と教師の関わり方 |
|-----|---|---|
| 一学期 | <ul style="list-style-type: none"> ◦授業中にしろ、休み時間にしろ常におしゃべりが続く。 ◦常に問題行動をかかえた仲間と行動を共にする。 ◦髪はパンチパーマ、服装違反で今更制服を着けることが恥ずかしいという ◦タバコを毎日半箱ちかく吸っている。 ◦サッカーが好きで部活動は頑張っているしかし髪を切るぐらいなら試合には出ないという。数日たつと髪をきちんとしてくる。 | <ul style="list-style-type: none"> ◦学活時の発言は消極的な発言が多いが、追求していくと前向きな発言に変わるのでその時オーバーに誉めると自己アピールする。 (いままで自分が認められたことはないのではないか) ◦髪についてはパンチパーマがカッコイイと思っているので「君の顔には別のヘヤースタイルが似合うよ」と話す。 (問題行動集団では仲間意識があって、急に止めさせることは難しいかもしれない) ◦タバコの害についても知っているのが、やめられないので一日5本に減らしていくと約束する。 (本当にやめられない状態まで常習化しているかもしれない) ◦スポーツは好きであると共に素質があるようだ。 「君が参加しない試合は勝つ見込みはないね」 「残念だね」 (相手の中学校には勝つ自信があると言っていたな) 「嬉しいな、試合に勝てるぞ」 |

| | 生徒の動向 | 内面の理解と教師の関わり方 |
|-----|--|---|
| 二期学 | <ul style="list-style-type: none"> ○リーダー研修に参加する。 ○書記に立候補する。 「高校進学のためという」 ○タバコ、深夜はいかい、飲酒で指導される。 夜も問題行動の仲間と一緒に遊んで楽しいという。 ○高校進学に不安な様子「今の成績でどこの高校に行けるか」と聞く。 ○塾にいき勉強するようになる。 ○夜遊びの帰り、暴行を受け、目の周囲が真っ黒になる。 ○休み時間もわからないところを同級生に教えてもらっている姿が目につく | <ul style="list-style-type: none"> ○存在感をもたせよう。 (母親の話から兄・姉との比較があり、卑屈になっているようだ、母親には甘えているんだろう) ○(家庭には居場所がないのだろうか、両親揃っているのに) 「サッカーもうまい、スポーツも何でもできる、しかし、能力はあっても何も努力しない人は人間として残念な生き方だね」 「どこの高校を希望しているの」 「いけるかではなく、いきたいかだよ」 「希望の高校にいければそれでいいし、勉強したくなければ無理して行く必要はないのではないか」 (兄や姉が通っている高校に自分だけいけないのが屈辱に思っているんだろう) 「深夜はいかいの害を身をもって教えてくれたね」 ○意識的に、考え方のしっかりした女生徒数名と一緒に話して話させる。-将来何になりたいか- (仲間との間に意識のずれを感じ始めたようだ。将来の事を共に語り合える、そして、共に歩める仲間ではなくなっているのを感じたのではないか。) |
| 三期学 | <ul style="list-style-type: none"> ○最後の総合テストがふるわない。 ○さかんに何点とれれば希望の高校に合格できそうなのか聞く。 ○だんだん仲間からの嫌がらせが始まる。 「仲間を抜けたのではない、からかわれているだけだ」 ○卒業式にはまた、仲間と共に大暴れをした。 ○希望するの高校に落ちたうえ、二度目の高校にも不合格であった。 | <ul style="list-style-type: none"> 「頑張っている姿は素晴らしいね」 「人が変わったみたいだね」 ○彼と気の合いそうな生徒に学習面を助けてくれる様に頼んでおく。 「良かったね、これで仲間から抜ける事ができそうだね」 ○いい機会だから、仲間から抜けるように説得する。 「君の仲間がやっている事は絶対許せない行為だよ」 (彼の仲間はほとんどが小学校からの付き合いなので、簡単には離れることができないんだろうな) 「残念だったね」「これからが君の出発だね」 ○これまでの彼の生き方では社会に通用しない事を身を持って感じていけばきっと取り返しはきくし、これからが自分で決定した道を歩むことになるだろう。 |

《事例2からの考察》

一ケ年間、O君との関わりの中で、何が彼にこのような行動に走らせているかを考えた時、家庭でのしつけ、地域の環境、学校の雰囲気、本人自身の問題、友人関係等、彼に対して多大な影響を与えている。彼の両親は教育に無関心ではない、朝早くから夜遅くまで働いている。しかし、子供の成長過程に関わるべき事が足りなかったのではないかと考える。O君は寂しい幼少時を過ごしたのではないかと、そして、いつもひょうきんで強がっているのは人に認められたい、甘えたいと求めているのではないと思われる、この一ケ年間、彼に対しての関わり方は常に受容しながら、いつも自己決定するように要求してきた。しかし、この一ケ年間では行動変容の兆しが見えただけにすぎなかった。よほど意志強固でなければあれだけ行動を共にした仲間から離れることは難しいものがある、現に離れようとした時、様々な嫌がらせが続いた事を考えれば環境を変える以外方法がなかったように思う。現在彼は浪人をしてしながら目標の高校をめざし勉学に頑張っているまた、高校に入学してサッカーを続けたいと意欲をみなぎらし、そのために体力と技術が落ちるのを防ぐために社会人サッカー部をお願いし週一回の練習に参加させてもらっている。「タバコを吸ったら、サッカーするのに体力がなくなるから止めた」と断言し、とうとうタバコも止めたのである。また、「将来体育の教師になりたい」と目標も定め、仲間とは接する時間はないという。

3 教師の自己変容の必要性

教育の営みの中で教師の生徒に及ぼす影響は計り知れない。例えば、教師の指示が多ければ生徒は依存的になるといわれる。また、権力的であれば、生徒は反抗的になるといわれている。教師のあり方によって生徒の教師に対する感情も行動も違って来る。生徒理解に観察する方法があるが、観察する教師によって見方が違う場合がある。これは生徒の問題ではなく、教師の問題である。つまり、生徒理解を深める事は、教師自身を理解することである。

兵庫教育大学の研究紀要8の中で「教師行動の実験的変容が児童の学級適応に及ぼす影響」の研究結果がある。その中で行われたことは教師の指導態度が無条件の肯定的配慮、一致性、共感的理解をもって学級の指導に当たった学級は①欠席率の低下、②自己概念の向上、③学力検査得点の上昇、④規律上の問題の減少、⑤学校の設定・備品に対する破壊行為の減少、⑥知能指数の向上、⑦創造性得点の向上、⑧自発的で思考レベルの高度化などきわめて肯定的な様子を示したとある。このことから、教師の指導行動のあり方により生徒の行動変容につながるであろうと思われる。その意味からも教師自身が自分を理解し、改めなければならないことは何かと自分自身を分析して、自分を変えていく必要があると考える。とりもなおさず、教師が変わることにより子供が変わるということは確かなことであると考えられる。

(1) エゴグラムによる自己分析

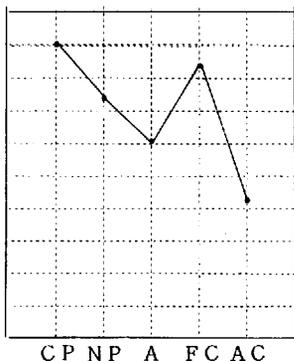
自己分析するにはいろいろな方法があるといわれるが、その中で短時間でしかも分析が簡単であるエゴグラムを利用した自己分析の方法をとった。エゴグラムは全ての観察可能な行動を5つの自我状態(CP, NP, A, FC, AC)に分類しそれらの発生頻度をグラフに示したものである。エゴグラムは個人の性格の中に潜む力、性格のいろいろな状態を援助するエネルギーという二つの面から性格を描写し、行動を修正していく方法である。

(2) 自己分析の実践

<教師自身による分析>

- ・ 生徒と冗談を言い合ったり遊んだりする反面、生徒の悪い面ばかりが気になって注意することが多くなり、生徒とじっくりいかない時も多い。
- ・ 自分の求めていることに対して生徒が応えてくれず、不満を感じることが多い。
- ・ 常に自分が正しい事を前提にしているので生徒を押しさえつけるようにする。

図 7 私のエゴグラム (実践例)

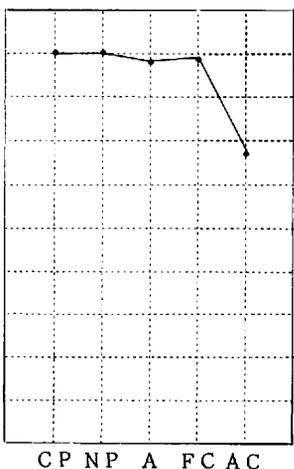


エゴグラムによる自己分析

CP・FC優位型である。自分自身は勝手気ままに振る舞いながら、子どもには批判的である。計画を立て、冷静に行動する事が苦手で、そのときの気分や思いつきで行動しやすい。子どもを理解する面で客観的な面に欠ける傾向にある。

- ・ 子どもの気持ちや感情をプラスの面でのとらえ方をする。
- ・ 他の人の意見を聞いたりして、公平な態度で接する。

図 8 目標のエゴグラム



エゴグラムによる自己変容

エゴグラムによる自己変容とは各自我状態のエネルギーの配分を変えることである。そのため、目標とされる自我状態は一般的にNPとFCを高く、ACをそれよりも低くする方向にする。そのために気をつけることは

ア子どもの話の内容を正確に聞き、判断するために

「～ということですか」と確かめる。

イ子どもと接するとき、その時の気分で接するのではなく公平に接する。

ウ子どもを見て、その言動から気持ちを客観的に理解する。

エそのときの気分や思いつきで行動せず、よく考えてから行動する。

などである。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 問題行動生徒の背景がつかめた。
- (2) 本校生徒の実態がつかめた。
- (3) 生徒理解の方法がわかった。
- (4) 教師の変容により生徒が変わることがわかった。
- (5) 生徒を取り巻く環境の実態がわかった。

2 今後の課題

- (1) 教育環境を行政と協力して浄化していく必要があるのではないかな。
- (2) 親の放任を地域の教育力でカバーしていくようにしたい。
- (3) 家庭の門限を設定することにより、深夜はいかいをなくすることができるのではないかな。
- (4) 教師がカウンセリングマインドの共通理解をしていく。

《主な引用文献・参考文献》

| | | |
|-----------------------------|----------------|---------|
| 生徒指導の機能と方法 | 坂本昇一著 | 文教書院 |
| 子供の見える行動・見えない行動 | 菅野 純著 | 歴々社 |
| 沖縄の青少年非行と背景 | 幸地 忍著 | |
| 誰もが身につけたい生徒指導 ・学校教育相談の技法 | 全国教育研究所連盟 | ぎょうせい |
| 兵庫教育大学研究紀要 8 | 浜名外喜男・北山鎮道著 | 研究論文 |
| 子供の行動変容 | 東 正著 | 川島書店 |
| 学校カウンセリング | 国分康隆・米山正信著 | 誠信書店 |
| 中学・高校生の心理と指導 | 塩見邦雄・吉野 要著 | ナカニシヤ出版 |
| 学校適応への援助と指導 (平成3年度研究紀要) | 北九州市立教育センター | |
| 心理学を学ぶ | 大山正・詫摩武俊・金城辰雄著 | 有斐閣選書 |
| キーワード生徒指導 | <編集>菱村幸彦 | 教育開発研究所 |